銀鈴第拾八號（毎月一回二十日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治四十年一月一日發行

文学雑誌 銀鈴

第拾八號

新年の辞

我が「銀鈴」の生れてより、裘葛を更ふること、早く已に二たびとなりぬ。顧れは波瀾毎に逼り、痛苦交々到れるの間を過ぎりて、茲に丁未の春を迎ふよろこばしからざらんや。我誌の微力聊さか貢献せる所ありしを信ずれ共、前途未だ極めて遼か也、唯社友並に愛讀者諸彦の厚き芳情に感激し、庶幾くば一段の踴躍を以て、平素の眷愛に酬ひんのみ。謹んで敍す。

丁未元旦

銀鈴社同人

銀鈴第拾八號掲載目次

禁轉載

菜　汁(譯　文)……文學士　川上櫻翠
梅の花(俳　句)……厨川千江
銀鈴社詩稿(短　歌)……牧岡けい子
わ　が　家(長　詩)……高城七星
若葉の蔭(譯　文)……千代延春圃
銀鈴社詩稿(短　歌)
その二……後藤藤朗
その三……河野素陽
その四……森脇桃村
その五……西岡萩雨
その六……木村秋浦
その七……菅原紅雨
わが記(美　文)……多田東岳
十五夜(長　詩)……磯の少女
銀鈴社詩稿(短　歌)
その八……山本潜龍
その九……増野翅白
その十……小川菫月
その十一……中村秋泉
その十二……松田月浪
その十三……松本掬雨
その十四……磯の少女
その十五……河野翠激
文藝雜俎(評論)
東京より……辰巳生
昨年の詩壇……深編笠
文界片々……黒華生
俳　句……羽風、梧月選
零れ露(俳　句)……神の子等
(長　詩)……菫月
青　玉(短　歌)……梅原梅窓等
寄贈新刊……
廣　告……

菜　汁

川　上　櫻　翠

やもめなる農婦はひとりの子を持てり。そは二十歳の若者、村中の働き手なれど、今は身まかりぬ。

村の地主なる夫人は、この女の悲しみを聽きて、悔みにと、埋葬の當日、訪づれぬ。

やもめは家に在りき。

その茅屋の中央に食卓を据えて、急がずに、右手を正しく動して(左手はじつとそのままに)黒みたる皿の底よりうすきぼたんの汁をすすり、ヒ一杯に盛りては飲み居たり。

たもわは打沈みて、生氣なく、眼は赤みて膨れあがれり――されど

會堂に在ると同じ樣に嚴正に身を持しぬ。
夫人は、「あな、斯る時にも食事を爲せり、いかに人情のなき事よ」とおもへば、その一瞬、數年前に、生れて九月になれる娘を失ひ、かなしみのあまりピータースブルクに近き住みなれし里にも住みわびて、ひと夏、都に過ぐせしことなどれもひいでぬ
その間に女は菜汁をずゝれり。
夫人は堪へかねて、遂に、「タテアナわれは驚きぬ、汝れは汝が子を何ともれもひ給はぬや、斯る折にも食慾は捨てがたくてか、いかなれば汁を食し給ふや」
「わがパシアの死」、女はしづかにいらへ、悲しみの涙はまた頬につたはりて、「そはげにわが身の終り、わが胸は裂けぬ。されど汁はすつるものにあらず、それには鹽分のあれば」
夫人は唯肩を聳して去りぬ、塩分は齒牙にもかけで。

（ツルゲチーフ）

梅の花

千江

板敷に鬘を干すや梅の花
解剖して歸れば寒し梅の花
籔蔭に六座の佛や梅の花
竟宴の人醉ひにけり梅に月
店淺く佛書をひさぐ梅の鉢

銀鈴社詩稿

牧岡けい子

疑ひの雲霧はらひわが鏡君をうつし
ぬいとなごやかに
心さびし君を見ぬれどにこやかに語
るといへどれも飽かすぼ
君見ねば荒涼(すさ)まじさはれ對つ座は俯(うつ)
居(ゐ)しらぬ頬丹摺りながら
影のごとこの身まとひて黄泉(よみ)の谷誘(ひ)
くかと恐れうき人おもぶ
兩頭(りやうとう)の蛇のさまして愛慾と恐怖とめ
ぐる胸の大野は
秋の雨しづく蛇の目の破れ傘に肩身
しぼめて暗き街入る
香のつよき花に埋れて溝渠は二人の
間(あい)に横はりぬる
わかれもひ胸にどよみぬいつの日か
道をしたまふとざし開きて
み目やさし心うへよき人をもゑ我れ
と惡夢に病みもこそすれ

わが家

高城七星

南にむけるわが家に
戀しきもののふたりあり
長月ばれの日の夕べ
そぞろあるきに見いでつつ

「ひとつの莖に二た種の
花のこころ」をうかがへば
無言に肩をならべつつ
君口づけてゑみましぬ

色こそ淡き花なれど
戀しきひとと移し植へしか

若葉の陰

千代春延圖

世の中は何が常なる飛鳥川で、實に人間の一生程解らぬものはない、一寸先は闇の夜といふが、全くその通り、何んな運命の手がぶら下つて居るか一向知らずに過去ることが多い、然し、それが一々解つてなら、此世は喜怒哀樂の情に驅られて鳥渡も安心することは出來ない、して見ると矢張知らずに過した方が好い。

太一が人知らぬ一日の歴史は、近くは以て此の間の消息を明かにするに足らう

彼れの前半生は茲に說く必要がない、只彼は雲州生れで、其の素性も賤しくはなく、普通の敎育もうけた上、青春二十才の好少年である事をいへばよいのである。其の叔父なる人は岡山のさゝやかなる八百屋であるが、今度彼れを引取つて、帖場に座らせやうといふので、今しも大道を岡山へと辿りゆくのである

夏の日の朝つぱらから、正午頃迄も歩行いたため、身体も疲れた上に、暑さも次第に增して來たので、涼しき若葉の陰でもあつたら、驛馬車を待つてから、暫く腰を下ろさうと考へたが、いはゞ彼れが爲めともいふ

べき一叢の楓林が見えた。其處は、心床しい幽境、一脈の雪泉が混々として絕えず湧き出て居る。それも自分の爲めに沸くかと思はれて、太一は其渴いて居る唇で、數度キッスをした。既に誰かゞ口を觸れたとも、但しは觸れぬとも、其んな樣ことを考へる隙はなかつたのである。で、木綿縞の風呂敷に包んだ二三枚の襯衣と一着のズボンとを假の枕として、コロリとやつた。日光も來ず、昨日の大雨で塵もたゝぬ。身に布いた綠の床は、綿毛のにも增して、若い男には却つて相應しう見えた。傍りには宗聲懶げにつぶやき、仰げば樹皮夢の如く碧空に戰つて、人をして坐ろに眠を思はしめる。睡魔は强く彼れが身を襲ふた。恐くは何んな夢を見たかも知らぬらしう。

彼れが前後も知らずに樹下に眠つてる間に、或は徒歩、或は馬上、或は樣々の乘物で炎熱燒くが如き道を往來して居る。或者は面も向けなかつた。或者は一瞥しても、何處に誰れが居るかも氣がつかなかつた。中には馬鹿によくねて居ると笑つたものもあつた。その中四十許りの婦人が、そつとあたりに人の居ないのを見てそろりつと森の中を覗つた、そして如何はも美るはしい寢顔だといつた。又禁酒演說家は、亂醉の恐るべき好適例として、可憐の太一を其夜の講話の材料にした、か、知らぬが佛とやら、誹も、讃辞も、笑語も侮蔑も、但しは冷談も、太一には何の感もなかつたのである。

彼れが眠つてから、彼是二三分も經つた頃、逞くましい二頭だての褐色の馬車が一輛、フトろれが太一の寢てゐる少し手前で立止つた。轄がぬけて、車輪の一つが落ちかけたのであつたが、損じは案外に輕くて、此馬車で、岡山へかへらうとして居た、五十格好の紳商夫婦が、一寸驚いた位のもので。馭者と馬丁は車を修覆しにかかつた間に、老夫婦は木陰に入つて、圖らず彼の湧泉と、其岸に寢てゐる太一を見た。一体誰でも眠つてる時分には一種嚴肅の感を起さしむるもので紳士も此の感に打たれたのであらう、痛風に惱んでる歩みを輕やかに〳〵と運んだ。夫人も彼れが目覺めてはと音せぬやうに心を配つた。やがて紳士は

「たい婆さん、よく寢てるぢやないか、何うしてまあ此樣に心地ようねられるんだらう、あのすや〳〵とやつてる息を御覽！まるつきり極樂へでもいつてる樣ぢ

やないか、私の財産の半分位投出してもいゝから、お酒を呑まずに、此樣に寢て見たいもんだね！」

「そりや年が若いからですよ、どうして年がよつては此樣に寢られるもんぢやありませんよ」

路傍の木が紋穀子の張を垂れた下、靜かに寢て居るかの樣な、この見も知らぬ少年を、老夫婦は、つく〴〵と視て居たが、フト木の間を洩れる一條の光線が、顏にあたるので、夫人は「たや〳〵此樣にまあ日が當つて」とつぶやきながら、樹の枝をたわめて、ソツトハンカチーフをかけた。丁度自分の子にでもする樣に。

「何うも亡くなつた辨二に似てるぢやありませんか、なんだか、神樣が養子にしろつて下すつた樣ですわ、貴郎起して見やうかしら、ねえおこして見ませうか、貴郎！」

「起したつて詰まらんぢやないか、まだ何んな人だか解からないのに！」

「でもまあ、あの品のある顏、そして罪のない眠樣つたら、こんなに可愛らしいに！」

あゝ幸運は今彼れ太一が上に臨んで、幸ある手が黃金を投げださんとして居る。此老紳士は其の獨り子を亡くしたので、自分の財産を讓る遠い親類が一人あるが、どうも素行が修まらぬといふので、思はしくないので、夫人は勸めがほにまた、

「起して見ませうか、ねえ貴郎！。丁度此時「旦那、旦那！もう車もなほりました、た乘りなさい！」と馬丁の聲がしたので、老夫婦は、「ハッハ、、、世には妙なこともあるなア」といひながら、此所を出た、が、太一はまだ快く眠つて居るのである。

彼の馬車がまだ一里も行かぬ中に、活潑な步調を以て、一人の可憐なる少女が來かかつた。なんだかうれしさうに、いそ〳〵として、帶の解けたも知らず步るいてゐる、やがて解けて居るのに氣がついて、結びながら木陰によつて、見るともなく太一の姿を見て、顏をボッと薔薇の樣にし、帶もそこ〳〵にしめて、そつと木陰を出やうとしたか、此時何處から來たか、一匹の熊蜂か、頭の廻りをヒラ〳〵飛んで居たが、ット太一の睫毛にとまらうとしたので、我を忘れて、帶の間の分巾を出して、追ひ拂つた、香水の香はあたりにさつと漂ふた、恰も繪でも見るやう、少女は恥かしさうに、太一を盜み見た

「たやまあ可憐らしい人なのねえ！」と少女は考へた、頰にはさつと紅がさして、滾々として盡きざる泉のそれのやうに、淸き戀はみち〳〵たのであらう、そして「ほんに自烈つたい樣に、よく寢入つてゐつしやること」と獨語してると、フト人の足音の聞えるので、あはてゝ傘を取り、そこ〳〵に去つた。依然として太一は寢てゐるのである。

これと引違に、コツリ〳〵と忍足にやつて來た二人の男、何れも色淺黑く、人相獰惡なる者共、ぼろ〳〵になつた帽子を斜にかぶつて一見、昔ならゴマノハイといふ代物。太一の寢てるを見て、一人に私語いた、

「コウ、あれを見ろ、あれを……」と太一の方を指した。

「うむ、よくねてやがらあ、二才奴が！」と後のは頷いた。

「晝間の仕事にしちやアうめえなア、あの枕の下の包を見ろ、なんだよ、まだ懷にもあるに違いないぞ、懷になきやあ胴卷にあらア」

「起きたら何うする？」

「ヘン、馬鹿野郞細工は粒々仕揚を御覽じろだ、コレがわからぬかい！」と短銃を見せた。すると、「よし　」と呟やきながら、そつと太一の傍によつた。若し二人の惡徒が淸泉に影をうつしたら、何んであらう、恐くは惡徒自身でも、屹度惡魔と取違へたに相違ない。然し太一は猶よく眠つてゐる。

「ではやるぞ！」低聲に私語いた時、何處からか、一匹の犬が走つて來て、惡徒の顏を見ると吠えようとするので、

「チヨッ、モー駄目だ、犬の飼主がやつて來るらしい、跫音がするア、早く逃ろ〳〵！」と一目散に逃げ出した。

こんな危險場合でも、すや〳〵と眠つてゐる。フト目を醒すと、馬車は街道に止まつて居るので、そこ〳〵に荷物をまとめ、岡山へと向つたのである。

あゝ、彼れは、富が懷に入らうとしたことも、淸き愛の手が觸れんとしたことも、亦死の影がそつと襲はんとしたことも一切永劫に知らずに去つたのである

（をはり）

銀鈴社詩稿

後藤藤朗

白斑の牛どもあまた群れゆくと雪消の遠の山見る日かな

大象の力もつ子もよわ〳〵と曳かれゆくなりむつまじき日よ

河野素陽

枕して聴きぬ遠鳴る潮の音としたしきさまの千鳥のこゑと

冬の月夢よりさめて母戀ひぬこころ凍れる夜にもあるかな

森脇桃村

秋風は裸公孫樹の二の枝と町の地藏のみ袈裟吹くかな

北の海すごき音して氷山のくづるるごとし刹那のこころ

「われ等いと剛の者よ」と冬の野の瀟殺に立つ雄々し松杉

西岡萩雨

うちつけに云ひもかねたる夕よりうき髮いたくみだれけるかな

花ちる日うす紫の霞より君が前髮ほの見ゆるかな

木村秋浦

世な咀ふ無信の人と光得し祈願の人とわが胸に來て

ものかげの暗きに怖ぢし心地して初めて君を戀ひし日おもふ

菅際紅雨

美くしき罪のむくひか百萬の惡鬼逼りて喰むよとおもふ

ああ君よつれなし人とあくまでに憎めいささか罪うすらがむ

危うかりきかかる險阻をともなひて辿らむとしぬ瞬時の思ひ

薄倖の身を泣きまさむ專念にわが冷酷をむちうちたまへ

木枯はみ胸にふきぬわがこころ冷えよとばかり悲しきゆふべ

わが記

多田東岳

罪なきかなむぢ。邪なきかなきむぢ。たゞ泣き、たゞ呑み、たゞ眠り、たゞ笑ふ。そのなくや、その呑むや、その眠むるや、その笑ふや、あはれ那邊の意義がある。あはれ那邊の思惟がある。

たのもしいかなむぢ。ゆかしいかなきむぢ。げに人は、世は、かくてあれかし。かくもがな

われかけて知りぬ。天の手を離るゝときはなべて善なりき。人の手に任かせられては、なべて惡となれりきと。かくてなれたこの言に漏れざらんとするか。げにわれはあやかゞず生れたり。さあれ人間進化の理法をたづねなば、素より善なるそが性、必ず天にかしづかれてながくおぼしはぐくまるべし。

偉なるかなむぢ。尊いかなきむぢ。泣き、笑ひ、眠り、呑む。げに人生いくそのことわりを示して、われにいひしらぬ教訓をめぐみぬ。まこと人生の式相はさもながさまに似たるかを。

其の泣くや、その笑ふや、乍ちにして起り、乍ちにして移る。泣くよと見ば笑ひ

、笑ふよとみば泣く。思へば生滅輪廻、さながら水の泡、朝顔の露にもたとへつべく、朝に非、夕べに是、げに人間矛盾の理を示すかな。

笑ひ泣き、泣き笑ふ。あはれをかしきか、悲しきか。思ふに人生活動膨脹は、またこれにほかならぬべし。げに聲は活動に生まれ、活動は聲を生みぬ。聲ある所膨脹あり。膨脹ある所聲なきはなし。見よや夜の帳あけもきて、金線乱れ射て下界を照し、万象ひとしくそが活動を始めては、人の足音、鳥の歌、必ず聲あらざるはなく、天の反響、地の叫び、げにまた活動なかふずや。

かくてつかれ、かくて泣きわぶるや、倏ちにしていね、倏ちにして憩ひぬ。げにやもの皆ひと日の營みにつかれてたぬしき、うまき憩ひに入る如く、あはれ凋落の秋の哀、げに夏春のつかれを、いやすが如し。

かくてさめ、かくてれどろくや忽ちにして泣き、忽ちにして動きぬ。げにさひしうの冬ざれ、春のわだちのめぐりきて、世は皆勇む花の錦の如く、まことや一活動起らんずるにさきだちてはそこ必ず一靜寂ありと、思へぱ大なる啓示なるかな。

その呑むや、そのすふや、誰が教へし、誰にかならへる。あはれ食は性なりと、人

われを欺むかぬかな。もかしきかなむち、たのしきかなきむち、げに欲なきなり。げにれのづからなり。かくて人は身心をそこなはぬなるべし。うたてや人は物それの、さめてくやしき夢なるを知れども欲焔のもえきては、あと青葉の色同じきを、花の盛りにあこがれて、そこに已むを知らざるなり、げにけらくば、追へば無極に去りもきて、土にかへるのはかなさ思へば痛むべきかな。

あゝうぶの御神のまな子天の御神のめづ子、さらばとはにすくやかなれ。さらばとはに榮え、あれかし。この身むくろにかへるとも、ながいくそのさとしには、今は安くもまかるべし。たゞこのことわりに勇なかちんを恨とす。思へばつれなの身やな。こゝに苦悶のさりもかで、せめてはやらむなれに寄せご。と世はわれさきのくらべ馬、落ちしを突ふそのほかに、あはれと見べき人もなく、物憂と聞かむ人もあらざれば、固よりあはひの絕ち得ざる、さばまめやかにつかへかし。さばまめやかにいたはれかし。げにや慰安の界にして、げにややすらひの愚者なりとは、こゝ知りそめし高き言、思へばさてもたのもしきかな。

十五夜

磯の少女

今日しも八月十五日
宵晴れ空をひんがしゆ
雲ほの白したゞずまひ
一筋夢とむらさきの
水派曳きはゆるあえかさや
女神の懐ゆるされし
幸の和魂あこがれの
羽振なよびの美し時。
飛行の羽搏ゆるごとに
風さとかをれ七草の
大野の錦香に泌て
滴りの甘露地をうてば
銀鈴なりぬ、玉蟲の
美妙さこやきつぎ〳〵に
消ぬるとしては輝かの
またゝき繁き星の彩。

あなや一ゆれどよめきに
天の華々露の玉
乱れ散らばふ煌燿や
黄金のうしほさながらの
宇宙を圓らの月影は
頬圓ずる笑の童顔
黒斑ゆるさぬさやけさに
山を出でけり尺ばかり。
鄙も都も野も山も
隈りもれぬ一色の
薄青衣につゝまれて
弘誓の舟のみちたらひ
天華に酔ひて星の國
かたみに懐く和魂の
接吻あまき影を見よ
眞如の月のその面に

▲短歌募集課題
△冬の野 東京 平野萬里氏選△一人十首以内△〆切一月末日まで延期す、奮て投稿あれ

銀鈴社詩稿

山本潜龍

わがうれひ君がみなげき音にたてて
よよとし泣きぬ冬の夜の灯は

ともすればおもかげ夢む日をへだて
忘れし戀の君と思へど

富士のみね王者のさまに光明の眞な
かに立ちぬ初日する時

増野翅白

險峻の谷をへだてて白蘭の花こそか
をれなつかしきかな

小川董月

まつ宵は風のおとにもなつかしき君
が來べしとおもひつつ寝ぬ

野も山も芥のなかの朽舟もこがね色
して初日のぼりぬ

中村秋泉

櫧林霜おく道を小急ぎて往きぬ後朝
の二十二夜月

松田月浪

春の磯木立めぐれる君が家に銀の雨
する晝戀しけれ

時雨する大森林のなかにしてかすか
に磐の音きこゆなり

松本掬雨

君に似る菊おほく植へおんこゑを忍
ぶと籠にすずむし飼ひぬ

宵月は青地の綾に白ぎくを花紋に染
めしかたちして居ぬ

磯の少女

あな不覺戀の甘酒としいつはりの濁
酒に酔ひて永遠を病みふす

河野翠㵎

この日また遠びと思ひ痛ましきわが
戀ごころ涙ながれぬ

七尺のながきみ髪よ夕月は俯居の君
が頬にさしにけれ

物おもふこころよさびしき閨の月落髪
ひろひ夜あけぬるかな(女に代りて)

文藝雜俎

東京より　辰巳生

其後は大に御無音に打過候、大兄愈御健勝且つ御詩興もたかに入らせらるゝならむと羨望罷在候、それに反し、牙籌にたづさはる身は、朝夕の小閑時すらふ、法律經濟の新聞雜誌に趁はるゝ始末、されば、文藝の方面に於ては、見聞する處、至つて狹隘にして、申上ぐる程の事もこれなく候へ共、御無沙汰御詫び旁二三申上ぐべく候。當地の劇界は、團菊追善興行以後、稍寂寥の觀ありしが、秋季に入りてより漸く芝居季節と相成候。川上一派は、明治座に於て、「祖國」を演じ候、萬朝子などは、譯者掬汀氏との關係上、大分提灯を持たれ、可なりの入に候ひしが、優人としての技藝は、失敗に畢り候。川上一派に演者なきは、已に明白なる事に候へ共、其事情を萬々承知しながら、見て來て愚痴をいふが、東京人の癖に候。次で同じ座にて、二代目左團次の改名披露兼追善興行ありしが、今又渡歐の名殘として、大川友右衛門を演じ居候、好評に候へ共、其好評たるや、同優の技を賞するの辞にはあらで、火事場の大道具に對する賛と聞きては、興醒心地いたし候。川上一派が出演せしと同時に、歌舞伎座に、伊井一座が「サフオー」を出し候、「サフオー」は彼のドーテエの名作、その冒頭に於ける

「一寸、こつちをお向きなさいな――そうよ――私あなたの目の色が好き、お名前は何とおつしやるの」

「ジヤン」

「只ジヤメ限り」

「ギヤンゴツサン」

「南の方から――てせう――お幾つ」

「二十一」

「美術家(?)」

「イ・エ」

「そんなら伺いゝわ」

の一節忘るべくもあらず候、されど、これが本邦の劇となる時は、警視廳の　似非道德の篩にかけて、精選する事に候へば、香も味もなきは自明に候、尤も、伊井河合の優技は賞すべきものに候。鷗外先生の「両浦島」は、先年市村座にて演し、今回は二回目に候。伊井の浦島は、一回目より品下れるやうに覺え候、一体この作は、わろくはなけれど、良きものにもこれなく候、同先生の作にても、辻説法の方、遙に崇高の觀これあり候。其次の興行たる雁治郎の紙治は、滿都の士女を狂奔せしめ候、その概評は、「明星」十一月號に掲げ置き間候、御一瞥被下度候。追善興行といふもの、大分流行と見えて、目下新富座に　守田勘彌の追善これあり候、いつまで、親の七光のおかげを、蒙るつもりにや、劇として注意すべきこともなく、唯歳の市の、羽子板の押繪の材料位に候ふべし。東京座に芝翫高麗藏一派ありしか、別段の事もなく、本鄉座の高田一座は、劇に於ける眞趣味を解せさる男女學生を相手にする事に候へば、いゝ加減のものに候、男女學生の劇趣味は何雄と何子が何うしたといふ甘いものか、讀賣の小說(このうち青春を除き候)位が、お歯に合ふことゝ、下町の鈍張芝居に都新聞の小說が、歡迎せらるると、甲乙これなく候、ハムレツトやオセロ位、學校で讀だとて、劇の味は　中々わからぬものと見え候。されば、早稻田文藝協會の實演など、諸新聞にては、御招待に對し、挨拶として賛辞を呈し候へ共、嚴正なる評より申さば、水口薇陽、土居春曙氏を除きては、他は前途遼遠に候、常闇の缺點は安藤弘氏が「明星」に指摘したる通りに候、これよりも若葉會の方、遙に上に候。文藝評論に至つては、早稻田文學記者と生田長江氏との間に、「無戀愛小說」につき、一寸小衝突これあり候ひしが、要するに、双方誤解より出でし事、は帝國文學記者が申す通りにて、一寸の行かゝりといふものに候はむ、されど、早稻田文學記者が、殊更に、無戀愛小說として、戀愛小說に反して、一幟旗を樹つるやうにせしは、耳障りに候、又漱石氏の猫、藤村氏の破戒に、獨歩氏の運命を加へて、鼎立せしめしは、少々不用意と存候。後者と前二者とは作物、の上よりいふも、同一架に置くべきものにあらず、又年代より見るも、大分逕庭これあり候。十一月の早稻田文學に、新体詩界につきての評論ありしか、大体に於で、肯綮に中れるものに候。同し號の卷頭に金子馬治氏の宗教的眞理これあり候　其要は「宗教的眞理、情意の經驗的事實其のものゝ中におのづからに、又必至的に含まれたる最終の內在的事實、情意の經驗其のものより自然に、又必然的に會得せらるべき最終の眞理、比喩を借りて言

は丶經驗的事實其のものより必然的に推理せらるべき最後の判斷なり」と說かれ、極めて穩健なる說と存じ候。帝國文學に、蒲原有明氏の譯述にかかる內鑾の關係といへる一論議有之候へ共、未だ通讀不致候。中村不折氏の「畫界漫語」は、折々諸雜誌に現はれし、畫談を輯めしものに候、就中、日本畫の特質を論して將來の刷新策に及ぶといへる一文は、刷新策につきては、名論もなけれど、特質につきては、公平に說きて、餘蘊これなく候。裸体畫論、ローランス氏の談など、おもしろく候へ共、更に短片なれど、日本畫家を論じたる觀察には、敬服致候、光琳の寫生を重したるを說き、「光琳の寫生は、實物の甘味を遠慮無く取つて居る、其爲め博物の標本のやうなものを、寫生と心得て居るもの丶眼から見ると、寫生てはないやうに見えるか、其實寫生の眞妙の域に達して居るものである」といひしは、小生の如き、光琳崇拜者にとりては、百年の知巳を得し心地致候、鳥羽繪正論などに至つては、着眼かれもしろく候、元來、小生は、不折氏の作品に對しては、敬虔の念なきものに候へ共、氏の評論に至りては、感謝致すものに候。

新作としては、鏡花氏の春晝を、新小說に見候へ共、處々捨て難き筆致はあるものの、何となく物足らず、寧ろ、嗽石氏の草枕の方おもしろく候。藝苑に戸川秋骨氏の太平洋上の生活、すら〳〵として心地よく、マークトヱンの作を、見るやうな趣味を得候、同誌に、上田敏氏の鏡影錄なくなりて、評論欄は、ものさびしく相成候。其他に、申上けたき事あれど、次便に讓り候、尙貴地文壇の御近況など、おもらし下さらば、幸甚に候、終りに貴誌の隆昌を祈り候、早々敬具。

昨年の詩壇

深編笠

□年頭に方つて、少しく昨年の詩壇を回顧して見やうと思ふ。

□惟ふに、昨三十九年に於ける短歌並に新躰詩の發達は、近頃目覺しきものであつた。一般の讀詩眼および創作力が、極めて摯實なる態度を以て進步し來つたのは爭ふべからざる事實で、從て新進の頭角を現はしたものも決して二三のみでなかつた。

□のみならず、久しく忘れて居た「詩の勢力」といふことが、最も切實に評論家の頭を刺衝した。言ひ換へると、新躰詩短歌の類が、如何にしてかばかりの勢力を文壇に有した乎と云ふことが、不言不語の間に、評論家の腦裡へ一疑問として湧き來つたのである。

□故に、輕佻なる評家は、コリヤ大變だ、何うかして詩の勢力を毀たうと、あらゆる惡語を放つて、熱心に從事してゐる某々派を傷けやうとした、ために、その殘忍なる毒手が一部の詩社に向つて投ぜられたけれども、大勢は已に動かすべからず、秩序ある發達は着々として步を進めた。

□新躰詩に就ては次に述べるとして、先づ短歌界の概況初める。

□今の歌壇に於いて相應の實力を備へ且つ常に創作に從つてゐるものにして佐々木信綱氏 尾上柴木氏、渡邊光風氏、金子薰園氏、窪田空穗氏等、各々其勞作を發表したけれども、未だ我等をして敬服せしむるに足らない、何故なれば、修辭の上に缺點があるか、纖弱に過ぎざるか、豪壯に衒ふか趣味が極めて淺薄なるか、孰れにしても、佳作又は傑作の贊辭を呈する譯に參りかねる。故を以て、

□今の歌壇に於ては、兎に角明星派が一等活動してゐると云つて毫も差支へぬことゝ信ずる、先以て同誌の短歌に移らう。

□與謝野晶子女史の詩風は、益々渾成圓熟の狀態に入つて、句々凡べて入神の作、作每に一新境を拓くの感がある。

□高村碎雨氏は、新作每に何等か齎らす處がなけねば承知せぬといふ風を示すけれども、一月の明星に一寸顏を出した限り、今は滯米中に屬するを以て、姑らく之を省く。

□川上櫻翠氏も短歌の發表は、數に於て比較的尠かつた、けれども

春の雨ゆゑろうご多き夜語に初めて見たりうつ
くしき人

の如き、溫藉なる方面に於て一頭地を拔いて居る。

□平野萬里氏は、主として長詩の側に振つてゐると云つて可いだらう。氏の詩は最も清淡な處に異彩を放つて居た、一寸見には誰にでも摸し得られさうなものもあるが、さて仲々さうも行かぬ。數に於ても可なり有つたやうだ。

□茅野蕭々氏は、昨年に入りて漸やく、格調の正整を

見るに至つたと思ふ。

□吉井勇氏は、誰やらが「海の詩人」と云つたほど、海に關しての作が多かつた。

□秋庭俊彦氏は、歟に於て他の社友を壓するの慨が見えた。調も極めて整ふて居る、蓋し平野萬里氏と遜きもの乎。

（以下次號）

文界片々

黒華子

◎金子薫園氏の詩集「わがれもひ」及び「和歌入門」「草堂歌話」等出づべしと傳ふれども、余輩未だ之を歡迎するの雅量を有せず

◎平野萬里氏の詩集「わかき日」は、丁未新春の詩壇を飾るへしといふ、同氏の詩か公刊せらるゝは、時に取りて極めて妙なるべし。

◎川上櫻翠氏の詩集亦近きに上梓せらるべしと、余輩は一日も其の早かふんこを望む。

◎大阪毎日新聞社が前後二千餘金を懸てけ募集せる、長篇小説第一回の發表に於て、甲賞に當選せる「嫁ヶ淵」の作者小笠原氏は、鄕を銀鈴社と同うす、余輩之を光榮とす。

第五回懸賞俳句

○課題南瓜　羽風選

南瓜の腸豚に與へけり　靜秋

住職は老いて南瓜を作り鳧　孝平

南瓜煮て通夜する人に侑め鳧　梅窓

南瓜煮て惟然と秋を惜み鳧　五香

解家の古木を積むや南瓜畑　同

○課題　秋の雨　奈倉梧月選

秋雨に木魚叩くや竹林寺　枯竹

秋雨を休む隣の鍛冶屋哉　同

先考の佛事する日や秋の雨　米成木

小屋を中に鷲靜まりて秋の雨　同

孤兒院に兒のなく聲や秋の雨　孝平

秋雨や旅の終りの山の宿　同

枝川に鰻釣る灯や秋の雨　五香

田虫鳴いて櫓田暗し秋の雨　同

寺の裏に焚かぬ竈や秋の雨　同

裏川に鼠棄てけり秋の雨　同

秋雨や焚き殘りたる黍の殻　同

歳旦の晴衣並べし一間哉　同

磯の宮海の初日を拜み鳧　同

あかあかと金屏の灯や歌かるた　同

秋雨の巷走るや點燈夫　蜂伏

行秋や乘れば雨漏る郘車　同

投げし麩に鯉浮ばぬや秋の雨　同

牛市の果てし塲末や秋の雨　同

秋の雨新墓の四花流れけり　同

天（登賞）

秋雨や暮れて一度の渡舟　五香

追吟

墨こぼす塾の窓下や秋の雨　梧月

零れ露

初鴉宮にまたゝく灯かな　洗耳

若水や十戸の村の一つ井戸　同

山門の燈火見もる夜寒哉　萱月

老僧は何にか桀ずる枇杷の花　月浪

霜よけの煙れる岡や冬木立　同

閉門の庭をあるくや小六月　同

畏こまる下男をかしき雜煮哉　榊の子

歳旦の古き國旗や貧が家　同

▲懸賞俳句募集

○第七回課題（〆切一月十日）

△枯草　祝羽風選

△薺沓（雪沓）　奈倉梧月選

○第八回課題（〆切一月末日）

△毛布　祝羽風選

△落葉　奈倉梧月選

●各題十句以內、用紙半紙、本社宛

春

萱月

綠に萌もる野邊の小草、
紅淡き眞垣の梅、
うらゝに初日空を染むる。
春告げ鳥よ小窓に來て、
わが詩の幸をことぶけかし、
常樂の色滿ちわたりぬ。

青　玉

○　　梅原梅窓

黄金扉にみ輦入るとうつくしき天馳使鳥わたるなれ

○　　加田白梅

夕しぐれたち葉にさせる落日のなかにれはするさびしき人よ

○　　三島渓雲

哀愁に涙ぞれつるれもかげはかかる時にもほのに影すれ

寄贈新刊

▲あかつき七ノ七▲ササヤキ二▲御國一ノ四▲文華一ノ二　一ノ三▲琵琶文壇五ノ二▲五月三ノ十一、十二▲若櫻二ノ十一▲行餘會誌一ノ六▲浮城四ノ一、二▲金箭二▲山陰公論二、三▲ワカバ二ノ十一▲無限思潮二ノ十二▲わかな卅五十五▲藻の花三ノ九▲宇宙二ノ六▲紫陽花七ノ一、二▲スゞムシ二、三▲山鵠三ノ十二▲若菜籠五、六▲シブキニノ三▲しろはと二▲潮光九▲明ボノ七▲キサラギ終刊號

謹みて新年の御祝詞
申述候

丁未元旦

銀鈴社編輯局

河野翠瀲

菅原紅雨

千代延春圃

月刊
雜誌　**ふた葉**

定價郵税共金五錢

月一回十五日發行

●總裁木村小舟先生曰く、(上畧)ふた葉の生るゝや予は私かに此感なき能はざりき、然るに其内部組織の鞏固なる、當事者の斯道に忠實なるに依り自ら進んで諸氏の事業を輔翼し(中畧)之迄地方雜誌に單に其名を列ねしに過ぎざりしものとは大に其趣を異にするものあり(下畧)と以て其値を知る可し。

●主幹森川芳溪宣言して曰く、(上畧)本誌は本會同人が文學に道德に鬱勃たる言論を吐かんと欲するに依りて成りしものなり(下畧)と以て其の主義を知る可し。

●來れ現代文界の墮落に慊厭たる者來れ!!!

發行所　**金星會**

東京。京橋。南傳馬。三ノ二

月刊
類題　**俳句新選**

第壹號

表紙極彩色　紙數八十頁　頗美本

(十二月一日發行)
第一號に限り見本一部　金七錢

月刊を以て類題句集を編むの企は本誌を以て嚆矢とす、苦心の吟を不朽に傳へ、後人に作句の摸範を遺さんとするの士は速に來り會せよ。

第三回俳句大募集

▲題　春季混題五句一組金拾錢二組より貳錢增
▲選者　梅村宇皎氏
▲〆切　一月十日限り二月一日第二號發表

●賞
(一)一等(一名)郵便葉書百枚
(二)二等(十名)同二十枚
(三)三等(百名)同五枚

▲肖像　每號一等當選者の寫眞を卷頭に揭ぐ
▲附錄　小說詩歌俳諧美文等の各文藝を揭ぐ

發行所　**慶岸堂**
東京市麴町區永田町二丁目

◎キサラギ終刊號(四十頁)金拾錢◎

銀鈴定價表

定價	一部	金五錢五厘
	六部	金參拾錢
	十二部	金五拾五錢
郵税	一部	金五厘
	六部	……
	十二部	……
廣告料	一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓	
	郵券代用壹割增	

明治三十九年十二月二十九日印刷
仝　四十年一月一日發行

銀鈴第拾八號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄

仝縣仝郡川本村大字川本五三八
印刷人　原八太郎

仝縣仝郡仝村大字仝五三八
印刷所　邑智活版所

島根縣邑智郡田所村
發行所　銀鈴社

銀鈴第拾八號（毎月一回二十日發行）明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治四十年一月一日發行